

【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

知子のネクタイ

小森知子・大阪府

古典落語に初天神という演目がある。一張羅の羽織を得た親父さんの嬉しさをおかみさんとの軽快なやり取りで語られる。どこへ出かける時にも「おい、羽織を出せ」という。歯切れの良いこのくだりは私の思い出を搔き立てる。

私が二歳の時、両親は別居した。その頃すでに、父の傍には一緒に暮す女性が居た。私はその人をおばちゃんと呼び、彼女に育てられた。奈良での父との生活は、祖父や親戚の心配をよそに、異母弟達と仲良く楽しいものに成りつつあった。中学校入学を前に少し大きめの制服を着て、新しい鞄を持ち父に見せると入学式までに背が伸びるかなあ…などと言つて目を細めた。そんな平穏な日々に突然、終止符が打たれた。私を巡る親権争いが起これり祖父の鶴の一聲で、大阪で暮す母の元へ行く事となつた。やつと、おばちゃんに心を開くようになつた矢先の事であつた。

数日後、母は意氣揚々と迎えに来た。父に「あんたの負けや、二度と会せないから」と鋭い言葉を投げつけ、玄関先から大声で私を呼んだ。

おばちゃんは、私の耳元で「行かないで」と囁いた。しかし、母は引き裂くように私の手首を握り引つ張つた。父は為す術も無く、ケースに入つた木琴を私の手に持たせてくれた。大阪駅で行き交う人々に大きなケースは何度もぶつかりその度母に叱られた。泣くまゝいと口を一文字に結んだ。

大阪での新生活は戸惑いの連続だつた。その上、父と会うことはもちろん、手紙を出すことも許されなかつた。ある日、寂しさのあまり木琴を探したが、どこにも無い。父との思い出の品まで無くなつてしまつていた。只々、息をひそめて、貝の様に殻に閉じ籠つた。何故あの時、母の手を振り払わなかつたのだろう。後悔の毎日だつたが、働くようになれば自由になれると自分に言い聞かせた。

やつとその日が來た。初任給で父に、ネクタイを贈ると以前から決めていた。何度もシヨーウインドウを覗き、父の顔に重ねてみた。それは細かな濃紺のジャガード織生地で、太さの異なる二本の水色のストライプが斜めに入つていた。涼し気な風合いはこれから季節に丁度良い。父に渡すその日まで絶対に見つかってはいけない。そつと鞄の底に潜め、さらに上から何枚もハンカチを被せて渡す日まで持ち歩いた。

待ちに待つた日曜日。友達の家に行くと母に嘘を言つて家を出た。自分の鼓動が耳に響き顔が赤くなつた。一目散に奈良へ向かう。懐かしい空、深呼吸をすると自分が殻から抜け出せたように感じた。玄関で「ごめん下さい」と小さな声で言つた。「お帰り」と父の大きな声。「これ…」あとの一言が続かない。ネクタイを渡した。父は、黙つたままうつむきその手は震えていた。

三年後、法事のため親戚が菩提寺に集まつた。当日、忙しく立ち働く父が控え室に入つ

て来て、私を見つけると微笑んだ。安堵の表情だった。父の姿が見えなくなるやいなや、叔母達がクスクス笑い出した。

「兄ちゃん、今日はさすがに黒のネクタイやつたね」

年長の叔母が小声で言っている。

「黒っぽいから……なんて言つてあれを締めるとと思うたわ」

もう一人の叔母が父の声色で真似た。

その後すぐに、私のそばへにじり寄り、面白そうにネクタイの話をしてくれた。父は、慰安旅行や宴会など人の集まる所へ行く際には

「おい、知子のネクタイを出しててくれ」

といい、行く先々で娘の贈り物だと自慢したそうだ。初詣にまでそれを締めるという。おばちゃんがこれは夏物だからと言つて止めても頑として聞きいれない。『知子のネクタイ』を締めた日は上機嫌で出かけるそうだ。まるであるの落語と同じだ。叔母達は笑つたが、私は涙を堪えるのに必死だつた。

自分が結婚してからは、少しは母の気持ちを理解しようとしたが、どうしても父の方に思いが走る。私の花嫁姿を見る事も叶わなかつた父に結婚式の写真を送り、一度来て欲しいと懇願した。しかし、嫁ぎ先での私の立場に気を遣つて来なかつた。父のそんな我慢も孫の誕生を聞くともう限界。やつと我が家に来てくれる事となつた。

その日、玄関先で父を待ち続けた。帽子、オーバーコート、マフラーと順に受け取り、首元に目は釘づけ。父と一緒に『知子のネクタイ』も照れている。それは随分くたびれていたがよく似合つている。

それから八年後、父は六十一歳で他界した。その翌日のことだつた。おばちゃんが、私にあのネクタイを強く握らせててくれた。

そつと頬ずりしたら煙草の匂いがした。